

俳句評釋

を買ひに出たといふことである「米買ひに雪の袋や投頭巾」といふ句も残つてゐる。この句は芭蕉忌で客をするのに米が無くなつて居るので、シヨボ／＼時雨て來た空を、米屋へ一走り急ぐ様で自ら此様が蕉翁其人に似て居ると感じたのである。

芭蕉忌や淺草の鐘雨になる 成美

芭蕉忌の日、小寒い日である。淺草の鐘が聞える。春ならば、翁の「花の雲鐘は上野か淺草か」といふ陽氣な鐘の響であるが、今聞える鐘は實に物淋しい。頓てその鐘が鳴り終る頃に靜に雨が降つて來た。鐘の哀音に誘はれて降つて

來たやうである。芭蕉忌の哀れな感故人の句に上つた鐘の音、まことに胸を斷つのである。

夷講えいかう此初雪はいくらにす 道彦

推古天皇九年三月、聖德太子が始めて市を設けて、商買を教へられ、その時、蛭子神に誓つて商買鎮守の神にせられたとある。商家では十月二十日にこの蛭子神を祭る。これを夷講といふのです。この時酒興の戯れとして、蛭子の像の前で、在合せの器物に假に價を定めて、千兩萬兩などいふ、賣る者が承知して必ず手を拍つ。これを夷講の賣買と稱へます。この句はこれを云たので、夷講の宴中、初雪が面

冬の句



白く降つて來た。風流氣の一人が大にこれを有難がつて「サア御主人、この初雪は幾干く」と戯れた所である。

先づ鯛と筆を立てけり夷講 史 邦

夷講の献立を書いて居る所であらう。夷講には鯛は是非無くてもならぬもの、故に餘の物はさて置き、先づ鯛と記したといふのである。「筆を立てけり」といふ言ひ振りが確乎としてゐて壯大である。この鯛といふ字を立派な紙へ、良き墨で大きく書いてのけた勢が句勢に現れて居る。

初時雨猿も小蓑をほしげなり 芭 蕉

初時雨に猿が濡れてわびしさうにして居る。小さい蓑でも着たさうな様子だと言つたのである。非常に佳い句とも思はれぬが有名な句である。七部集の中に「猿蓑」といふ書がある。これはこの句を巻頭において名づけたのである。この句で思ひ出すのは依田學海翁の氣焔である。

僕がいつか翁に遇つた時に、談偶々俳諧に及んだ。翁曰く「俳諧といふものは輕妙でなくてはならん、それに芭蕉といふ奴、彼奴話せねえ奴で、俳諧をイヤに六ヶ敷して仕舞やあがつた。「古池や蛙飛込む水の音」つて、馬鹿にしてる。「五月雨や猿も小蓑をほしげなり」なんて、詰らねえ事を言つたものだ云々と。「五月雨や」は御愛嬌であつた。大野洒竹子も



「談林が眞の俳諧だ芭蕉が出て俳諧で無い俳諧が起つた」と言つて居られる。兎に角芭蕉は一種の幽寂な趣を咏まむとした人であるから、輕妙といふ旨には合はぬものかも知れぬ。

俳句評釋

此心誰と語らむ初時雨

青蘿

冬に入つて時々急雨のあるのを時雨といふ、その始めてのを初時雨と稱へる。初時雨の淋しみに刺戟されて、幽趣胸に湧くが如しである。嗚呼この胸の趣を誰と話合つたものであらう。我友を訪はむか、友我を訪はむか、黙しては止み得ざる趣かな、と言つたのである。

僕が去年十一月の半過ぎ、日曜の朝早く起きて、借家の庭の左なきだに荒涼であるのに、初冬の朝、たい見るべきものは、軒端の榿樹の紅葉が朝日に直射されてゐる丈である。そのうちに隣家の大きな櫻樹の梢を壓せむばかりに灰色の雲の低う棚引いたのを見たと思ふと、忽ちバラ／＼と一時雨、落葉が縁側を走つて襟元に寒さを覺えた。雨は直に止んで、日が元の如くに照らして、鴉が一羽鳴かずに飛んで行くのが見えた。戀は楽しき苦みである、時雨は淋しい賑ひである。僕は何とも言へない興が起つて、直に親友の許へ、「今朝の初時雨御覽になり候や」といふハガキを出したら、返事に曰く、「例の朝寢にて何も知り申さず候き。この時

冬の句



ばかりは其友が惜かつた。

壁の蚊の留り直して初時雨

井 眉

秋を経て更に冬になつてまだ残つて居る蚊、瘦せ果てた蚊が壁に寂然と留つて居る。小動もせず留つて居る。初時雨がサツと来て、冷たい風が壁を掠めたので、その蚊がチヨイと留り直した、一寸動いてまた元の寂然になつた、といふのである。實に細い趣ではありませんか。

牡丹餅の來べき空なり初時雨

一 茶

初時雨の日、あゝ今日あたりは何處からか牡丹餅でも持

つて来て呉れさうな空模様ぢや哩と、稚い希望を抱いたのである。「わが背子が來べき宵なり」といふ古歌の口調を借りて言つてある。俳味といふものは實にこの句の趣の如きを指すのである。

ことくと暮の物言ふ時雨かな

斗 入

暮が低い聲で、ことくと鳴く、それを「物言ふ」といつたのが面白い。春雨に蛙、時雨に暮、よい配合である。

見るうちに人細り行く時雨かな

可 都 里

時雨を二階からでも遠望した景色である。淋しげに人

冬の句



俳句評釋  
 が時雨の中を通つて行く。見て居るうちに、其人影が細く  
 なつて行く。といふ様である。人が遠ざかるに従つて小  
 さくなるは普通の事であるが、「細る」といふのは實に淋しい  
 言ひ様である。

散る木葉このは中にちぎれし蔓もあり

蝶 夢

庭に木葉が散らばつて居る。その木葉の中には、垣の朝  
 顔の蔓のちぎれたのも交つてゐて、荒涼なる有様は庭でも  
 掃除する時に誰でも見附けることが出来る。唯それを寫  
 した儘で何の技巧を弄せずして、十分冬の趣が溢れてゐる  
 では無いか。第一篇に出した許六の「俳諧はなきと思へば  
 なきもの也、あれども案じてぬと思ひて案じ侍れば、成程  
 ある物也」といふ言は實に名言で、この句の如きは實に掃溜  
 の中からでも得られるのである。

木枯や鐘に小石を吹き當てる 燕 村

木枯は冬に入つて烈風の吹き渡るのを云ふ。和訓栞に  
 木嵐の義であらう、木枯では無からう、嵐をカラスと讀むの  
 は音便で、五十嵐をイガラシとよむと同じであると記して  
 ある。木枯が一吹きドーンと庫裏の傍の藪を揺つて、鐘樓  
 へ吹きつける、すると砂礫が鐘へバラバラと當たる、と云  
 ふ一種凄まじい趣を捕へたのである。砂と言つては平凡



俳句評釋

である、小石と言つたので、木枯の勢が顯はれてゐる。

木枯や日にく 鴛せむしの美しき 士 朗

木枯が毎日々々吹通して、四邊の光景が日にく 荒涼になる、唯鴛鴦の美しさが愈目立て輝いて來るといふ、荒涼と艶麗との對照である。この句の調子は千代の「落鮎や日にく 水の恐ろしき」を學んだのである。

冬木立月骨髓に入る夜かな 几 董

冬葉の落ちて淋しくなつた樹木の立てるのを冬木立といふ。冬木立が凄く四邊に立つてゐる。寒月が澄んでゐる。強い句である。

冬木立昔々の音すなり 一 茶

冬木立に風が渡る、其響が實に古びてゐる、大昔の如き音がする、といふのである。昔といふものを色で示したならば必ず蒼色であらう、蒼潤、蒼古などといふ。奈良の如きは蒼といふ心持がある。昔といふものを音で示したならば、必ずや冬木立を渡る風の音であらう。一茶はこの心持、直覺を言つたのである。確にこの音は現在のでない、過去のであ

冬の句



る大過去の的である。

枯柳紺屋の水の流れけり 三津人

柳が枯れて——枯れると言つても木其物が枯れたのでは無うて葉が盡く黄落したのを、枯柳といふ。枯柳の傍を紺屋から流す、藍に染まつた水が流れて居るといふ景。唯汚穢なる紺屋の水が、枯柳と結合された爲に荒涼な趣を發揮してゐる所に御目を留めて御覽じろ。よく荒涼々と繰返すが、冬の趣は荒涼であるのだから仕様が無い。

子を捨てる藪さへ無くて枯野かな 蕪村

この子棄てざればこの身飢うといふので、何處へ棄てたものか、と見渡しても、藪も何も無い、たゞ一望の枯野で、風悲しく吹いてゐる。途方に暮れて悄然と立つてゐる瘠姿。宛然舞臺の光景である。面白い趣向である、しかし作り過ぎた嫌はある。

貫之の船の灯に寄る千鳥かな 几董

土佐日記の景である。貫之が任地を發したのは十二月の廿一日で、寒い盛りであるから、船路に嘸千鳥が鳴いたらうと想像したのである。貫之の船の灯影に千鳥が啼きつゝ寄つて來る景を想像したのである。才氣のある句であ

冬の句



る。或雜誌の和歌の募集で、天に當つた歌に、何とかして船の燈火に千鳥啼寄る夕まぐれ哉、といふやうなのがあつたが、その景趣は全くこの句と同じである。

初雪や道が悪いと吐しをる

龍 眠

初雪としては勿體ない程降つた面白くてたまらぬので窓の下で風呂吹かなんかで獨酌を遣つて居る、誰か友人でも來さうなものだと思つてる途端、ガラリと格子の音、嬉しやと思つたが、何だ、俗物も俗物、生命保険の勧誘員とは驚いた。佛頂面をして居ても先方は一向平氣、どうも悪い物が降りまして、道が悪くて困ります」との挨拶。この初雪

を罵るとは以ての外の奴だと、佛頂面に更に青筋が立つ。「ぬかしをる」が言ひ得て痛快だ。

雪の鴉鴉の顔を見てなきぬ

存 亞

銀を布いた庭へ鴉が一羽飛んで下りた。そのうちに傍の玉を展べた樹の枝へまた一羽來た。下の鴉が今來た鴉を見付けてカアと鳴いた。雪中の鴉よく目立つので、早速友を見付けて啼いた所が嬉しさうで、大に風情がある。

一つづゝ窓があるなり雪の家

鶯 笠

平凡極まる句ではないかと云ふ人があらうが、平凡のや



俳句評釋  
うで決して平凡でない。小さな家がヅラリと並んで悉く雪で包まれて居る。その家が皆一つづゝ窓を持つてる窓のところ丈黒く見える、といふ目前の景を其儘描いたのである。文人畫によくこんな景があるぢやありませんか。

雪は唯人に向ひて降りにけり

太商

雪中を歩く時斯ういふ感がある。何方を向いて歩いても我が身へ雪が吸ひ寄るやうに降つて来る。襲つて来る。どうも雪といふものは人に向つて降るものぢやなと思つた所を言つたのである。主觀的の句である。恍けた恐なとを、左も發明したやうに言放つたところに俳味がある。

風の雪千む我を降りめぐる

樽良

イんで居ると、吹雪が卍字巴と我が身のまはりに舞狂ふ有様、かの「鉢木」の「餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候ふ、痛はしの御有様やな」と降る雪に道を忘れ、今降る雪に行き方を失ひ、一所にたゝすみで、袖なる雪を打拂ひし給ふ景色、古歌の心に似たるぞや」といふ風情である。

美しき灯のとぼりけり關の雪

蓼太

靜に雪の降頻る夜、遠くから關所を望むと、其處に灯が見える、その灯の光が一方ならず美しく見える、といふのである。滑かに言ひ下してあつて、「美しき」といふ語がよく利い

冬の句



て居る。この「美しき」の爲に灯影も雪も油畫のやうに活々として居るのである。

### 下戸は知らじ氷の下の水の味

百 明

酔醒の水の味下戸知らずといふ諺がある。この句は其れを踏まへて更に一步を進めたのである。夜更けて酔醒の水を飲みに行くと、水瓶は厚く氷が張詰めて居る、其奴を叩き割つて柄杓からグツと呑む、寒冽骨に徹する。この味あゝ下戸は知るまい、と言つたので。氷の下といふので、酔醒の水を更に甘くしたのが、この句の働きである。

### 石に聲あり落葉氷りて碎くる夜

遅 月

落葉が硬く氷つてるのが、石に吹きつけられて、粉に碎ける音がする、といふ非常に寒い夜を寫したのである。實際落葉の氷つたのが碎けるといふと有るか無いか僕は知らぬが、想像は出来る。「石に聲あり」と言ひ下したのも強くて宜い心持だ。この句は趣も奇、調も奇。イカ物食ひと言はれるかも知らぬが、僕はかういふ奇調の句も大好きだ。

### 原中や木々は平に月氷る

寥 松

月色氷るが如きを月氷るといふ。平原で、向うに冬木立の並んでるのが見える。其木立の丈が皆同じやうで平ら

冬の句



俳句評釋

に見える、其上を寒月が照らして居るといふ景。「原中」、「木々」「月氷る」、これだけは一向平凡な冬の材料であるが、「平」といふ字によくく御目をとめて御覽じろ、よくく玩味して御覽じろ。平らに單調に立並んでるといふ所に、寒い趣が自らある。この句を活かしたのは實にこの「平」の一字だ。

震るゝや魚の骨嚙む盲犬

保吉

掃溜へ盲犬が来て魚の骨を嗅ぎ當てゝポリ／＼と嚙んで居る、そこへ震が降つて居る、といふ怪しい景である。盲犬とは巧いものを見付けたもんだが、僕にはどうも少と作り過ぎのやうな氣がする。しかしよい句には相違無い。

水引の解けぬ寒さに箔の散る

篤笠

面白い寒さを見付けたちやありませんか。進物が到來した、水引を解かうとする、固く結んであつてなか／＼解けぬ、手先が凍つて居るので指に力もない、いたづらに水引の箔がキラ／＼と散るのも寒さを添へる。日常ある普通の出來事で寒がらせたのが怪手腕。

我寝たを首上げて見る寒かな

來山

敢て蒲團が横へ寄つて居るかと思つてもない。餘り寒いが、何處かに破れでもありはせぬかと見るのでもない。一旦横になつてから、唯何となく首を上げて自分の寝た恰

冬の句



俳句評釋

好を見たのである。そこに寒い趣がある。何故かと問はれても理由は言へぬ。寒い心細い句である。

玉摺の燈火寒き手許かな 樽 良

冬の夜、燈火の下に、玉摺が玉を摺り琢いて居る。玉を摺るといふこと、これが夏でも冷たい感がある、それが冬、しかも夜である。玉摺の手は凍て赤うなつてるのが燈火で見える。

蠅一つ我をめぐるや冬籠 曉 臺

冬籠といふ語は古くは草木が凋んで冬枯れてるのに言

つたともあるが、こゝにいふ冬籠は、人が寒さを厭うて家に立て籠ることをいふのである。誰も訪ふ人もない、寂しい部屋に、火鉢を抱へて孤坐して居る。すると自分の身をめぐつて、冬まで生き残つて居る蠅が唯一つ飛んで居るといふ様。室内の寂しみといふのが冬籠の趣である。

櫓の火や馬に見らるゝ夜の貌 存 亞

材に伐取つた木の根を掘出したものが櫓で、山家ではこれを焚いて暖を取るのである。櫓の火にあたつて居る顔を馬が見て居るといふのである。馬が人に近く居るとも見えて、其家の茅屋であるとも明に想像される。

冬の句



併句評釋

宿狭く炭によごれし著聞集

成 美

家が狭いので、炭の粉が本にかゝつたといふので、其本は古今著聞集である。炭によごれるといふ事に何となく著聞集が調和するのである。謠本は春雨の枕にふさはしく、朗詠集は七夕頃の机にふさはしい。源氏物語のある所は上品な家らしく、徒然草のある所は洒落な庵らしい。さういふ風に自ら書籍に特殊の趣がある。書名を句に詠込むといふとは一種面白いのである。この句の「宿狭く」は無くもがな。

はしり炭竊に腹の立たれたり

一 草

はしり炭といふのははねる炭のこと。パチ／＼はねるので取扱ひ悪いので、立腹したといふのである。「竊かに」といふ語が面白い。炭に對して立腹するなどは餘り馬鹿々々しいけれども、内々心中で腹を立てゝるといふ意である。

炭の中に花の形を見し夜かな

素 郷

幽玄體ともいふべき句でありませう。炭のおこつて居る所を見ると、灰になつたところに種々な裂目が出来て、それが炎の中に浮いて居るやうに見える。つく／＼と見て居ると其の裂目が種々に變つて行く。そのうちに偶然花のやうな形の輪廓をなしたのを、或晩見たとがある。とい

冬の句



ふので。一方からいへばこの炭も昔は花のあたりにあつた木であらうといふ想像から、こんな幻を見たともいへる。

衰へや火桶に張りし舞扇 二 柳

火桶といひ舞扇といふから、白拍子かなんかで容色優れて風流士の迷の種になつて居た女であるが、今は老婆になつて、唯身嗜みのよいのに盛りの頭が惚ばれるといふ人物を描き出したのである。その老婆が舞扇を張つた火桶を抱いて、あゝ思へば衰へたる妻かな、なに／＼山の櫻狩に、この扇にて一さし舞ひ、君の御感にあづかりしともあるを、と感慨に沈んで居るところである。

犬が來てもどなたぞといふ衾かな 一 茶

衾に引つくるまつて、戸の音がしても、見に出もしない不性な翁。誰か來たと思ふと、衾の中から「どなた」といふ。ところが隣の黒がやつて來た物音に、人だと思つて例の「どなた」と誰何した滑稽。一茶獨特の可笑味である。

町はづれいでや頭巾は小風呂敷 燕 村

寒くつて耐らぬが頭巾を持たぬ。まづ町はづれまで來た、これからはどんな姿をして行つても見る人も少ない。どりやこの風呂敷をストコ冠りで急いで參らう。



## 水仙にたまる師走の埃かな

几 董

水仙は仙氣ある花である。「淤泥の皓素を侵すを許さず」とか「氷肌冷淡として迥に塵を離る」とかいはれる花である。かういふ高潔な花も人間界に交つて、床の間などに置かれてをると、時は師走、段々と押詰まる、ドタバタと家内中が飛び歩くので、その埃が水仙の金盞に銀臺に溜まつたのを、詩人が見付けて、水仙に同情を表し、人間の無作法を憎んだのである。

## 餅搗や下戸三代のゆづり臼

許 六

祖父の代に造られた大臼を、今まで三代目出度く譲り傳

へて、今年も豊かに餅搗きをする。祖父も父も今の主人も皆下戸で、其の爲に間違ひも爲く家が榮えるのである。旨原の「しんせ」かす「しんせ」かす分四方餅の音といふ奇句は、多分飲み過ぎの爲の歎きであらう。

## 行年や孝子に賜ふ米五俵

綺 石

何太郎の孝行が御上に聞えて、御褒美とあつて米五俵賜はつた。必らずこの孝子の家は貧乏に違ない。老母が病床に居るに違ない。草紙で張つた障子、欠けた薬土瓶、澁團扇などの汚ないものと、積みあげた米五俵と對照して、光榮を顯はして居る、目出度い年の暮である。小學校の修身の



掛圖ですな。俳句評釋

行年を愚に驚のかまへ哉 三津人

驚が頸を縮めて足を一本にして立つて居る、實に呑氣なものだ。人は皆一刻を争ふ忙がしさ、いつでも驅出せる身構をして居るのに、といったのである。歳暮の忙がしさにゆるりと驚を観察して居る作者も、驚の夥伴だ。一茶の「鼻よのほゝん所か年の暮」といふ句もこれと同趣である。

待春や机に揃ふ書の小口 浪化

日頃亂雑な机の上も、正月が來るといふので、大に整理が

出來て、本の小口が揃つて居る、といふ清らかな句。

冬の句



## 第三篇 参考書

## 第一章 古人の俳句集

古名家の句を味はふといふとは俳句を作る上に於て必要などである。併し俳學者にならうとするで無く、たゞ作句家にならうとするのに、多くの句集を讀むには及ばぬ。

芭蕉、蕪村、一茶、この三人の句集を讀めばそれで澤山である。俳諧文庫の芭蕉全集、蕪村曉臺全集、一茶大江丸全集中のを見ても、芭蕉俳句全集、蕪村俳句全集、一茶俳句全集を見ても宜い。

字義を解するに力を集めるといふ態度で無く、句の趣を

味ふといふとに十分意を注いで讀むが宜い。

この三人は各特色を持つて居る。概言すれば、芭蕉は幽寂、蕪村は豪健、一茶は飄逸である。而してこの三人の趣を味ふその順序はどうかと云ふに、僕は初め蕪村、次に芭蕉、終に一茶といふのが自然であり有効であらうと思ふ。人が佳いと云ふがちつとも佳くは無いか、といふやうな亂暴な考を起さず、どういふ所が佳いのか是非探してあてようといふ考で、繰返し讀まなければ行けない。

## 第二章 古人の俳論書

古人の俳論書には作句上の教になる言が多く見える。



参 考 書

併しこの類の書を斯道の研究家以外の人が見る必要は無  
い。たゞ僕はこゝに許六李由共著の「篇突」白雄の「寂癡」是綱  
の「俳諧仕様帳」の三書を抜萃評註して、俳諧講話の結末にす  
る。

第一項「篇突」

この書の特徴は自然美を味ふ上に於ける識別を説いた  
所にある。

月を説いた所に、

名月に麓の霧か田の曇

三井寺の門叩かばや今日の月

雲折々人を休むる月見かな

と芭蕉の句を三つ擧げて、其次に、

名の字を容易に置ける事は元來未練の至なり。古人名  
の一字に腸を断てる事はたやすからず。名月けふの月  
月見此かはり聊有るべし。

と言つてある。同じ月でも、殊に名月と歎ずる場合には、他  
と異なつた趣がある筈である。その邊微妙の差別はよく  
この句を味へば悟ることが出来る。

又雪の所に、

惣じて初霜初雪等の初の字大事の一字なり。腸を厚案  
して容易に置くと勿れ。

と言つて、許六の句の

古人の俳論書



初雪や今朝下られし山法師

といふのを擧げて居る。前陳の名月、こゝの初雪、各其動かない特趣を發揮して居る。たゞ月と云つても宜い所に名月と言ひ、たゞ雪と云つても宜い所に初雪と言ふ等は人のよく遣るとである。さういふ人は名、初の字の必要な景趣を味ひ得ぬ者と見做される。

梅が香と菊の香、共に芳香あるものであるが、其景趣に於て其香の意味に於て大に差がある。その混同すべからざるを説いて居る。

梅が香にのつと日の出る山路かな

翁

菊の香や庭にきれたる沓の底

同

梅が香の旭は陽に向つて仁徳を發し、沓の底の菊の香は陰をやしなつて徳をかくせり。人々香の字に泥みて明德を失ふ、よく慎むべし。こゝに所謂明德とは、物の真趣を解する天性を稱したのであらう。

四季の雨風を論じた條に、  
春雨、五月雨のさかひ、夕立、時雨の勢大方似案し、霧雨、急雨の風情混亂せり。  
とあつて、

夕立に動せぬ牛の眼かな

木 導

村雨や朝露ながら夏大根

李 由



俳句講話

の二句が出してある。

海棠と梨花との條に、

海棠は梨櫻のさかひに咲けり。櫻は笑ふが如く、海棠はたしなみて笑はず。梨花は泣きたる顔に似たり、萬物思ひに沈みて人の下に立てるが如し。

とある。

斯く凡眼もて見れば相似た趣をも、精細に玩味して各の眞趣を悟つた所をよく會得すべきである。

寒暑の條に、

暖簾の顔にまつはる暑かな

節絹の紺の兀たる寒かな

汝 邨

李 由

と二句を擧げて、

暑からず寒からぬ物に結び合たるこそ作者の手柄とは云べけれ。

といつて居る。これは余り嶄新なとでも無いが、日が暑い風が寒い等といふ直接の云顯はしは、兎角平凡に陥るので俳に於ては好まない所である。

さてこの書の本文に附けて「發句調鍊の辯」といふのがあるが、その中に記憶すべき二ヶ條がある。

世上發句案するに皆題號の中より案する、是なき物なり。余所より、求來らば無盡藏ならむ。

これは句を作る時の材料の取り方を説いたもので一の題

俳句講話



目を取つて其句を作らうとする時には、其題目にのみ目を留めず、廣く目を八方に放つて、題に結ぶべき好材料を探り來れといふ意味である。

上手に成る道筋儘にあり。師によらず、弟子によらず、流によらず、器によらず、畢竟句數多く吐出したるもの、昨日の我に飽ける人こそ上手にはなれ。

これは實に達言である。あらゆる事に當倣め得る金言である。「昨日の我に飽く」とは勇猛なる不斷の向上を意味して居る。實に壯語である。

### 第二項「寂菜」

この書の特色は俳趣詩趣をいかにも深く説いた所にあ

る。

正風の大意を叙べた所に、

去來夜話曰、俳諧は物を憐むの事を要領とす。物を憐むとは、艸木の霜にあひ鳥獸の寒暑に苦むなり。されば常に臥したる乞兒に向ひて、きたなしと思ふ念起らば一句に結ぶ事難し。不便と思ふ心は則風雅の一句なり。

とある。實にあらゆる物に對して同情を持つといふことが文藝國の大法である。同情に乏しい者は金を儲けるとは出來るであらう、人に勝つとは出來るであらう、併し詩趣を解するとは出來ぬ人である。史記に他の史籍に見えざる温味の現はれて居るのは、司馬遷が多方面に同情を注ぐ人



であつたからである。  
又姿と情と即ち外形と内容とを二つに見てはならぬといふとを説いて居る。

姿情の事昔より論多し。姿を先に情を後にすといふも初學の事なり。情を先に姿を後にすといふは尤いはれなき事なり。姿情は天地の如し、姿情の論に惑はず、例の如く物に應ずる事を思ふべし。

昔公任が「姿心あひかなひて詠まむと難くばまづ心を取るべし」と言つたのは金玉の教であるが、それを此所には二に分てはならぬと云うたのは、公任に優る數等の言である。

用語に就いては、

和歌の言葉、俳諧の言葉とて二はなし。日本の本の言葉なり。

と言つて、和歌の用語、俳諧の用語と區別するのは狭い了簡であるといふとを主張して居る。

名所を使ふ事を論じた所に、

五月雨にかくれぬ物や瀬田の橋

木母寺に歌の會あり今日の月

下京や雪積む上の夜の雨

かくの如く五月雨にかくるべき物の隠れざる瀬田を稱し名月に歌よむべき所を木母寺に定め、雪の上の夜の雨を下京に定むる、皆名所を使ひたるなり。聊も名所に使



参考書

はるゝと有べからず。たとへば花の句を案するに芳野初瀬をかり、月の句を案するに嫉捨、石山をかり用ふるは詮なき事なり。

とある。當時の歌人が舊來の習慣通りに歌枕を使つたのとは大なる懸隔がある。舊來月の意味を持つて居ぬ名所に月を結び、舊來月の意味を持つて居る名所に風を結んで内容を豊富ならしめる等のとは興のあるとである。

句を分類した中に、

手を離れたる句

春の夜は櫻に明けてしまひけり

蚊柱に夢の浮橋かゝるなり

といふのがある。「手を離れたる」とは面白い評である。そこにかういふとが言つてある。

なりけりと言はなつ句一句の格なりと知るべし。是等の句は深く思入て其上發明せし句なり。よの當の句をなりけりと云放つ時は無心の物に魂を入るの案じ方を失ふ。萬象をよんで自己とすべし。自己を運んで萬象とする事なかれ。

とある。なりけりの注意は味ふべきものである。又萬象を自己とせよとは、詩人の本領をよくも云得たものである。なほ、

理窟をはなれて萬象を思ひ、無邪の良友とすべし。

古人の俳論書



参 考 書

といつて理窟を排せねばならぬ事を叙して居る。

第三項 「俳諧仕様帳」

この書の特徴は、通俗な書方で以て奥儀を説盡して居る所にある。

詩の定義をして居る所に、

人として喜怒哀樂己が心に包み難き時はあゝとかうゝとか聲に出るものなり。その聲も又聲のみならず、長短曲直交りておのづからあやをなせり、そのあやなせる言葉をさして歌とも詩とも連歌とも俳諧とも狂歌とも又川柳とかいふ類とも、様々其名は付次第なれど、とある。人感に堪へかねて發した歎聲が文をなしたのが

詩の本源であるといふのである。

みだりに古調に擬して想と形と相伴はぬは笑ふべきとであるといつて居る所に、

口に古風を唱へむとすれども今の心を其儘出せば、笏は持てども襷かけ、冠は着ても腰に手拭、言巧に心拙くおしあて事の間違も折ふしありとの世間話もあり。とある。

師に就いては次の如くいつて居る。

歌は歌、連歌は連歌、狂歌は狂歌、其道々に教あれば岡目八目、島水練、我俳諧のみ、東海道を通し馬にて通るとにはあらず、旅は道づれ世は情、達人には随ひて學び、又不能者に

古人の俳論書



参考書

は憐みて教ふべし。

實に物のよく解つた言である。何の道でも師に従ふといふことを尠ういふ考で遣つて貰ひたいものである。師の背に負ぶさつて、己は歩かずして東海道を見物しようといふ不了簡者が多い。旅は道連れといふやうな考で師に頼らねばならぬ。師にのみ泥んでは無効である、といふことを悟るべきである。

又初學者の爲に心安き三法といふを擧げて居る。

一曰題、二曰趣向、三曰調和、これを則三法といふ云々、題はいづれにたよりとするべし、云々、趣向は即題より出れど題にのみかゝづらひては、田舎老爺の麥稗商ふ勘定咄に

落入て、親椀にて風情なく大飯食ふ心地こそすれ。趣向といへるを一法とし、題に離るをむねとすべし。調和とは煮もの、鹽梅にて、たとへば吸物を仕立てむに、鴨は鳥にて、芹は草なり、異類のものを集め一種の味を出さむとするには、味淋醬油の加減第一にて、こゝに庖丁の品は定まれり。

さうして、例に「ほととぎす大竹原をもる月夜」を出して、郭公は題、大竹原は趣向、もる月夜は調和として居る。

### 俳句講話終

古人の俳論書







見よ 東亞堂 大益便

東亞堂 郵便振替貯金 加入仕居候間、御註文の節、送料、郵便料、書留料等に、御註文の封筒、御註文の書名、著者の姓名、冊数等、御申越下候へば、直に現品の有無、及共代價郵税、並に御送金の手續き等に關する委細の説明書御送附申上候

東亞堂 自店出版の書籍の外、各出版元と特約の上、博く内外の書籍を取揃へ、非常の薄利を以て、陸續御註文奉願上候

東亞堂 御品切れ、又は自店に持合せなき品と雖も、御註文の節は諸方搜索、能ふ限り御便宜を圖り可申候間、何品に不拘御註文奉願上候

東亞堂 書籍に關する讀者各位の御問合せに對しては、極めて懇切に、又迅速に御回答申上候間、必ず返信用郵券を添へ御照會被下度候

東亞堂 御註文品は多少に不拘、其都度敏速に發送仕候間、代價税郵共、必ず前金を添へ、郵便爲替なれば本郷一丁目郵便取扱所渡りに、郵券代用なれば一割増にて、御送附被下度候、但し往々收入印紙御遺しの請書も有之候へ共此儀は堅く御斷り申上候

東亞堂 更に出版部奮て良書を發行致し、益々讀者界に貢獻仕度き微意を擴張の上、偏に奉懇願候

幸田露伴先生著  
沼田穎川先生註

高評再版

註釋 二一日物語 五冊

全一冊總クローズ  
金文字入美裝  
定價四十錢  
郵税四錢

二日物語は露伴先生が、傑作中の翹楚たり。今其全文を引きて精到なる註釋を加ふ。『此一日』の何ぞ凄愴にして、『彼一日』の何ぞ悲哀なるや、渾身是れ詩の權化たる西行法師の心胸を活寫せし此一大名篇は、本書に依りて更に讀者と近親の便を加へたるものと稱すべし。

發行所 東京市本郷一丁目 東亞堂書房



# 參版 潮待ち草

菊大判全一冊  
體裁優雅  
定價八拾五錢  
郵稅十錢

潮待ち草は露伴先生の、隨筆也、自然觀也、人世觀也、はた社會百般の事物に對する觀察録也。詩を談じ、文を品し、史を論じ、處世を説きて、眞に他の企及すべからざる妙趣あり。以て品性修養の資とすべく、以て後進文を學ぶの範とすべし。附録『土偶木偶』の一篇も、亦先生が近作小説中の白眉にして、相俟つて讀者家諸君が案頭の光彩たらむ。

# 近刊 賴朝

(印刷中)

英雄由來風流事に富む、而かも我『賴朝』の情話の如く、波瀾、曲折の妙を極めたるは、蓋罕なり、露伴先生夙に頭大公が情の半面に心を潜めらるゝと久しく、博參考證、遂に斯の一篇を成す。然ゆるが如き青春の戀に惱める英雄の俤は、當代の文豪が靈犀の詩筆に依つて讀者の眼前に躍如たらむ、當に之れ近時文壇の一大偉觀!

## 幸田露伴先生著

# 野口米次郎先生新著

阪井紅兒畫伯畫

# 大歡迎 邦文 日本少女の米國日記

菊大判全一冊  
洋風美術的製  
定價七十五錢  
郵稅八錢

ハイカラ一式部『朝顔嬢』の無邪氣にして大膽なる觀察記。英文「日本少女の米國日記」を和譯せし物。英學生諸君が原文解讀の好參考書たるべきは、著者が自ら「元來自分の著者故、意味の間違つて居る點は斷じて無し」といへるにても知り給へ、警句妙語篇に満ち、一讀卷を釋く能はざる興味あるは、當年歐米の文壇を風靡せし珍書として、已に世界に高評ある所也。

# 秋元蘆風先生譯

▲袖珍新形美裝▼

# 最新刊

# シルレル詩集

全一冊百九十頁  
插畫七拾葉  
定價四拾錢  
郵稅四錢

獨の詩聖シルレルが名篇を、獨詩の和譯を以て盛名ある蘆風先生の慘憺たる經營を費して邦詩型に譯されたもの。彬々たる先生が麗藻は、幽婉なる詩聖の妙想と相俟つて、一誦恍惚たらしむるの興趣あり。

發行所 東京本郷一丁目 東亞書房

發行所 東京本郷一丁目 東亞書房



東京帝國大學講師  
東京高等商業學校教授張廷彦先生校閱  
清國北京張毓靈先生  
日本東京宮澤文次郎先生合著

官話速成篇

洋裝全一册  
正價三十五錢  
郵稅四錢

本書は張毓靈、宮澤文次郎兩先生が多年教授上の實驗に基づき支那語官話の教科書として編纂せられたるものにして、一々張毓靈先生の嚴父張廷彦先生の周密なる校閱を経られたる最新完全の良書也。

清國北京張毓靈先生 日本東京宮澤文次郎先生合編

東語速成篇

洋裝全一册  
正價十五錢  
郵稅四錢

官話速成篇の總譯にして一は以て清國人にして本邦語を學ぶ者の參考書たらしめんことを期したる物學者兩書を對修せば得る所更に饒からむ。

官話速成篇

洋裝全一册  
正價五十一錢  
郵稅六錢

官話速成篇と東語速成篇との合本なり。

發行所 東京市本郷區 東亞堂書房

德富蘆花先生序 角田劍南先生著

高再評 時文趣味情景

全一册體裁瀟灑  
定價四拾錢  
郵稅六錢

健實の想、莊麗の文、現今文壇評論家の泰斗として、よく理を盡し情を察する者は實に我劍南道士に非や。本書は君が讀賣新聞の日曜文學紙上に於ける、社會、文藝、思潮、人物等に關する獨特の評論に、自然、人生、美術、哲理等に對する隨時の感想、時文等を加へ、風雲の氣、兒女の態兩つながら併せ得たるものにして、近時讀者社會の耳目を一新すべき快著也。

渡邊國武先生題詞	好評嘖々第八版發賣
黑岩周六先生贊論	動中靜觀
佐々木信綱先生題詠	
三宅克己先生畫	
齋藤松洲先生畫	
全一册定價四拾錢郵稅六錢	

茅原華山先生著

華山先生の文は世既に定評あり西園寺閣下侯は「恰も蘇老泉の文を讀むが如し」と稱せられ渡邊無邊老侯は「山淺間、物産生絲、湖水諏訪、文章華山、武官福島」と謳はれ而して黒岩淚香先生は實に「其趣味の博きこと時人及ぶ者少し」と賛論せられたり本書は先生が半生の思想史にして又觀察史也篇を分つこと八其趣味の多様なる其文調の流麗なる近時出版界の一異彩たり敢而大方の瀏覽を俟つ。

發行所 東京市本郷區 東亞堂書房



在米國 茅原華山先生著

### 高評 再版 世界文明推移史論

菊大判全一冊  
定價五十一錢  
郵稅八錢

本書は筆を東北と九州に起し日本海岸と太平洋岸諸國の論評より亞細亞文明の東漸を論じては儒教と佛敎の批評となり歐洲文明の西漸を論じては希臘羅馬の文明及基督敎の批判となり歐洲の衰退米國の勃興日本文明の西漸を説きて朝鮮支那露國等の國俗民情に及び博く地理學、史學、人類學等に亘り歐亞兩文明が各東西に推移せし史上の事迹を詳論して日本の眞價及日本の世界に於ける關係的位置を發見し以て我大和民族の天職の存する所を指點す眞に刻下同胞必讀の快著也。

大日本催眠學會々長小野福平先生著 (大日本催眠學會藏版)

### 催眠術治療精義

菊大判全一冊金文字入洋布美裝  
正價九拾錢 郵稅拾錢

本書は、大日本催眠學會長として、本邦催眠術研究家の先覺者たる小野福平先生が富瞻なる學識と、多年の實驗とを基礎とし、博く東西の學說を參酌して筆を催眠術の原理に起し、心理學、生理學、醫學等の根底より催眠術を以て治療し得べき諸種の疾病の病理、症候、經過、療法等を説明せられたる催眠學界空前の大著にして催眠術研究者は、勿論、醫家、經世家等の苟も等閑に附すべからざる良書也。

發行所 東京市本郷區 東亞堂書房

宮内大臣 田中光顯氏題字  
子爵 渡邊國武氏手簡  
故 原抱一庵氏序 龜谷天尊先生著

### 再版 賜天覽 瑤 琴

袖珍全一冊頗美製本  
定價四十五錢  
郵稅六錢

本書は天尊龜谷氏が、其該博超凡の識を以て、宇宙の萬象を達觀し、その胸襟の琴線に觸れて流露せし筆の跡を、輯めて高雅なる一冊子となし畏くも、聖上 皇后兩陛下乙夜の覽に供し奉りたるものにして、詩歌あり、紀行あり、漫録あり、日本新聞は「苟も天尊を知らんとするものは必ず一讀すべき文字なり」と稱し、毎日新聞は「讀者をして感銘と窮りなからしむ」と言ひ、二六新聞は「野趣優き文字ありて頗る多方面なり」と評せり。

東京開成中學校 講師 佐藤仁之助先生著

### 好評 再版 新案百人一首通解

寸珍全一冊體裁典雅  
定價十錢 郵稅二錢

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえお順に排列し、ごくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本!

發行所 東京市本郷區 東亞堂書房







法科大學教授 法學博士梅謙次郎君序  
 法政大學總理 法學博士高田早苗君序  
 早稻田大學 監

亞浪白田卯一郎君著

再版 最近學校評論

洋裝全十一冊  
 定價百四十四錢  
 郵稅八錢

學校は人材の搖籃也、志望の成否繫りて學校の善惡に存す。本書は則ち東京に於ける各種男女學校の真相を、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、縱横の論評を試み、以て學界を警醒し、學生を利導せるもの。時に親を滅して斬馬劍を揮ひ、時に諄々として成功の福音を傳ふ。真に近來の快著にして又學藝修業者の新光明也、敢て滿天下の學生諸君並に父兄諸君に一本を薦む。

發行所 東京市本郷區 亞東書房

黑岩周六先生序 加藤咄堂先生著

▲新式美術的奇裝▼

高評 冥想論

菊列全一冊  
 定價三十五錢  
 郵稅六錢

興國の氣運大に熟し、國民品性の修養今日より急なるはなし、本書は、著者が該博の識と流麗の筆とを以て、品性修養の根柢たる冥想を、各種の方面より論究し、獨坐靜思の快感を説きて其理論と方法とを詳叙し、進んで禪の宇宙觀、人生觀を述べて、膽力養成の法に及ぶ、加ふるに其雜感の一篇は、實に君が牛生の思想史とも稱すべきものにして、奇想縱横、趣味滿幅、世の修養に志あるの士本書を讀まば、曉悟する所必ずや大ならむ。

幸田露伴先生序 加藤咄堂先生著

再版

冥想 朝思 暮想

全二冊  
 定價各冊三十錢  
 郵稅各冊四錢  
 合本上製七十五錢  
 同郵稅八錢

加藤咄堂先生は論客たるに俱に又文章家也其論辯の範圍の博きが如く其筆力の自在勁健にして奇想縱横の趣を極めたるは多く匹敵を見ざる所也本書は先生が坐臥住行住靜思冥想的餘に得られし感想數百則の中粹を抜き精を萃めて珊瑚珠を連れたるが如き物にして其趣味の多様なる其文詞の流麗なる之を近代文章の模範と稱すとも亦溢美の言にあらざる也苟も文章家としての君を知らむと欲するの士は座右一本を備へざるべからず。

發行所 東京市本郷區 亞東書房



◆ 近刊三種 ◆

加藤咄堂先生新著

人格の養成

「人とは何ぞや」改題

菊版全一冊

秋元蘆風先生著

シルレル  
研究 鐘の歌評釋

全一冊(印刷中)

東京開成中學校  
國語及漢文講師 佐藤仁之助先生著

受驗  
參考 日本文法解義

全一冊(起稿中)



30  
507



11511



087425-000-4

30-507

俳句講話

沼波 瓊音 / 著

M39

DBE-0775





